

日韓を軸にした「アジア太平洋カレッジ」の開設

—学部1,2年生向け日韓米国際共同教育の基盤づくり—

Establishment of College of Asia Pacific (CAP)

Based on Japan-Korea Campus Share:

Laying the Foundation of Japan-Korea-U.S. International

Collaborative Education Program for First and Second Year

Undergraduate Students

九州大学韓国研究センター准教授 崔 慶原

CHOI Kyungwon

(Associate Professor, Research Center for Korean Studies, Kyushu University)

キーワード：キャンパス共有、国際共同教育、相互理解、共通課題、海外留学

はじめに

九州大学韓国研究センターは、2011年度から13年度まで「日韓海峡圏カレッジ」を、2014年度からは、その発展版として「アジア太平洋カレッジ」を運営している¹。韓国のソウル大学校と釜山大学校、日本の九州大学、米国のハワイ大学（University of Hawaii at Manoa）に教育拠点を設け、2年間で1クールとして実施している。1年次には、日韓6大学の学部1,2年生140名が、夏休みや冬休みに2週間相互訪問する「キャンパス韓国」・「キャンパス日本」を実施し、2年次の夏休みには、前年度の日韓プログラムに参加した学生から20名の参加者を選抜し、ハワイ大学で3週間の「キャンパスハワイ」を実施する。キャンパスを共有し、相互理解を深めながら、共通課題に対応できるグローバル人材を育成することを目的としている。

¹ これまで数回にわたり、独立行政法人日本学生支援機構（JASSO）の海外留学支援制度からの財政支援を得ることができ、より安定的にプログラムを運営することができた。ここに記して感謝申し上げたい。

日韓を軸にしながら、米国も加わる国際共同教育プログラムの構築を手がける理由は何か。3つある。第1に、いち早くグローバル化を進めてきた韓国トップの大学とコラボレーションすることで得られる教育的利点である。これまで韓国の大学は社会的な要求に応える人材づくりを目指してきた。その影響により、韓国人学生はグローバル志向が強い²。英語やプレゼンテーション能力において、韓国人学生のレベルの高さに刺激を受けたという話を日本人の参加学生からよく聞くが、相手が英語圏の人であったなら、彼らはそれほど驚かないであろう。同じアジア圏のすぐ隣の国の学生が一步先を走っていると思うと、より強い刺激を受けることになる。その意味で隣国である韓国を海外留学の第一ステップとして設定し、両国の学生が協学する場を設けることの意義は大きい。

このプログラムは、日本の学生を韓国専門家として育てようとするものではない。むしろ、現地の学生と学び合う面白さに触れることで、長期留学に進むきっかけを作るためのものである。留学に行きたくても、海外での生活に不安を覚える学生が少なくない中、本プログラムに参加したのがきっかけで、アジアや欧米へ長期留学するようになった学生が出てきている。

第2の理由は、日韓の若者たちが相互理解を深めるための交流の場を提供することである。両国を訪問する人々は飛躍的に増えているが、それが必ずしも両国への正しい理解につながっているとは言い難い。相互理解を深めるためには、顔を合わせて語り合い、言いにくいことでも心を打ち明けて話し合うことをしていかなければならない。相手に対する誤解があったとすれば、それを正し、互いの考えを理解していくプロセスが必要である。本プログラムでは、同世代との交流を通してこれらを体験し、同世代の友達を通して相手国を眺めるようになる。両国の市民社会が「意識共有」を深めるための最も重要な支えとなるはずである。

第3に、歴史認識や領土問題などに閉じられてしまいがちな日韓関係をグローバルな視点から捉え直すためである。そのために本プログラムは、日韓を軸にしながら、ハワイ大学を新たな教育拠点として加えた。日韓両国は地域レベルでは違いが目立つかもしれない。特に歴史認識問題や領土問題に関心が走りやすいので、類似性に対しては体系的な関心を持つことは少ない。しかし、国際社会における日韓両国の立ち位置を理解すればするほど、それぞれの社会が抱える共通課題に目を向ける必要性に気づかされる。外交・安全保障問題をはじめ、少子高齢化問題を含む社会問題など、両国は実に多くの共通課題を抱えており、その中でどのように協力可能な領域を見出し、協力像を作っていくかが問われている。「双子国家論³」や「ミドルパワー連帯論⁴」などは、まさにグローバル社会における日韓両国の立ち位置に基づいている。世界は東アジアの安定を必要としているが、それは日韓の連携

² 岩渕秀樹『韓国のグローバル人材育成力 超競争社会の真実』講談社、2013年、56～82頁。

³ 小此木政夫「分断国家との脱冷戦外交—対朝鮮半島外交」国分良成『日本の外交』第四巻、岩波書店、2013年、97～100頁。

⁴ 添谷芳秀「中国の台頭と日韓協力—認識の束縛を超えて」、小此木政夫・河英善編『日韓新時代と共生複合ネットワーク』慶應義塾大学出版会、2012年、80～82頁。

なしには実現しえないのである。このような側面から、グローバル社会を視野にいたした日韓両国の協力関係づくりを議論するために、第三の場所で新しい見方に触れる機会を作る必要があると判断した。ハワイは日本人にとっても、韓国人にとっても、様々な意味で関わりの深いところである。その歴史的地理的な位置から、ディアスポラ（ハワイにおける日韓移民の歴史）や戦争と安全保障、東アジアと米国のかかわりを学ぶのにふさわしい場所だと考えている。

1. 先行プログラム「日韓海峡圏カレッジ」の成果：海外留学へのきっかけづくり

「日韓海峡圏カレッジ」（2012年度～13年度）は、文部科学省特別経費の採択を受け、海峡を挟む福岡と釜山の代表的な大学である九州大学と釜山大学校の2大学間コラボレーションによって推進された（図1）。両大学の1年生それぞれ50名ずつ、合計100名の1年生が、夏休みを利用して2週間に

「キャンパス日本」・「キャンパス韓国」



図1 日韓海峡圏カレッジ

わたって釜山と福岡を行き来しながら、九州大学と釜山大学校で一緒に学ぶ「キャンパス共有」を行った。参加資格を1年生に限定したのは、早い時期から外国の学生との協学の必要性に気づき、アクティブな学び方を身につけるとともに、海外志向を持って長期留学の必要性に気づききっかけを提供するためであった。

キャンパス共有を可能にしたのは、2大学コラボレーションによるカリキュラムの共同開発を初めとする共同教育体制づくりであった。釜山大学校と共同教育委員会を組織し、事前準備だけでなく、プログラム実施後の評価をもとに、共同で改善策を見出すなど、プログラムの充実化を図ることにも力を入れた。2012年度には九州大学（集中講義として開講）と釜山大学校内での単位化を実施し、2013年度からは単位互換協定に基づいた単位互換を両大学間で実現した。こうして教育の質保証を伴う国際共同教育プログラムとしての基盤を固めることができた。

本プログラムの最も大きな特徴は、日韓混合グループでの活動である。日韓を行き来しながら実施するため、自国で受入れ役を担う時には、受け入れ国の学生が、ホストとしてリーダーシップを発揮する。互いの文化及び生活様式を紹介し合い、フィールドワークでの調査・研究はもちろん、インターンシップのプレゼンテーションでは、専門や国が異なるグループ構成員と協力し合い、課題の解決に積極的に取り組んだ。海峡を越えてキャンパスを共有して学び合い、学生がリーダーシップを発揮できる場を設けることで、新しい学びのスタイルを見出したのである。

3年の間、日韓合わせて約220名の学生が参加した。本プログラムに参加して自信を持った多くの学生は、その後、別の短期プログラムはもちろん、長期留学に臨んだ。九州大学の参加者110名のうち、長期留学だけでも、毎年5名程度、これまで17名の学生が、その翌年か、翌々年には交換留学をしている。参加者の15%を超える割合である。渡航先は、米国、スウェーデン、フランスをはじめと

する欧米や中国、シンガポール、香港、タイ、韓国に至るまで多様である。韓国人学生との学習を通して育まれた海外志向が、彼らを次のステージへ突き動かしていることが分かる。また、本プログラムをきっかけに、本学に交換留学生として来日した韓国人学生もいる。海峡を挟む両地域で学生のモビリティを活発化させる役割を果たしたのである。

そして、高い志を持ち、学業に優れ、将来社会の様々な分野で指導的な役割を果たし、広く世界で活躍することを目指す学部学生に九州大学が授与する「山川賞」においては、本プログラム参加者から、毎年1、2名の受賞者が出ており、これまで通算で8名が選ばれた。授与が始まった2012年以来、全学部から計35名の学生が受賞してきたことを考えれば、約23%に当たる高い割合である。その奨学金をもとに、交換留学に挑んだり、海外の大学院への留学を希望したりしている学生もいる。全員が同賞の選考プレゼンテーションにおいて、大学1年時に参加した「日韓海峡圏カレッジ」での経験を取り上げている。1年生の夏休みに海外で学習する面白さに触れたことが、その後3年間の大学での学習を方向づけたことや、その成果をもとに留学計画を立てたことをアピールポイントにしていた。本プログラムが、学内の取組みと好循環を生み出し、日本人学生の海外留学を促進する触媒としての役割を果たしていることを企画・運営を担当している者として嬉しく思っている。

参加学生のその後の活躍ぶりをみると、彼らにとって本プログラムは、グローバル人材となる第一歩であり、成長の原点となったと言える。本プログラムでの経験を活かして「福岡・釜山大学生未来大学生フォーラム」を立ち上げた学生たちがいる。交換留学を終えた学生が中心となり、福岡側（九州大・西南学院大・福岡大）と釜山側（釜山大・東西大など9大学）から計20名の学生が経済・文化・教育の3分野に分かれて議論を重ねた結果を提言としてまとめ、2015年の「第10回福岡・釜山フォーラム」で発表し、日韓のオピニオンリーダーたちとディスカッションを行った。学生主導の活動をリードし、日韓学生の情報交換や交流活動のプラットフォーム作りをしたのである。また、やはり本プログラムへの参加がきっかけとなって海外志向が強まり、海外勤務できる海運会社に就職した卒業生もいる。本プログラムへの参加、またグローバル人材として活躍したいという志が会社側に高く評価されたという。

2. 発展版として「アジア太平洋カレッジ」を開設

「日韓海峡圏カレッジ」の成果を土台に2014年度から日韓米国際共同教育プログラム「アジア太平洋カレッジ」を運用している。日本からは九州大学、鹿児島大学、西南学院大学が、韓国からはソウル大学校、延世大学校、釜山大学校が参加している。2015年からは東アジア学に強みを持つ米国ハワイ大学マノア校（University of Hawaii at Manoa）を教育拠点として設定した（図2）。

本プログラムは、2年を1クールとして実施している。1年次には、日韓を行き来しながら実施する「キャンパス韓国 in 釜山」・「キャンパス日本 in 福岡」（夏季）/「キャンパス韓国 in ソウル」・「キ

キャンパス日本 in 福岡」(冬季)が行われる。そして2年次には、1年次の参加学生から選抜された学生がハワイで実施される「キャンパスハワイ」に参加する。1年次のプログラムで互いの相違点に気づき、理解を深め、それらを土台に、2年次ではグローバルアジェンダに対する協力の在り方を模索する深化学習をしていく。

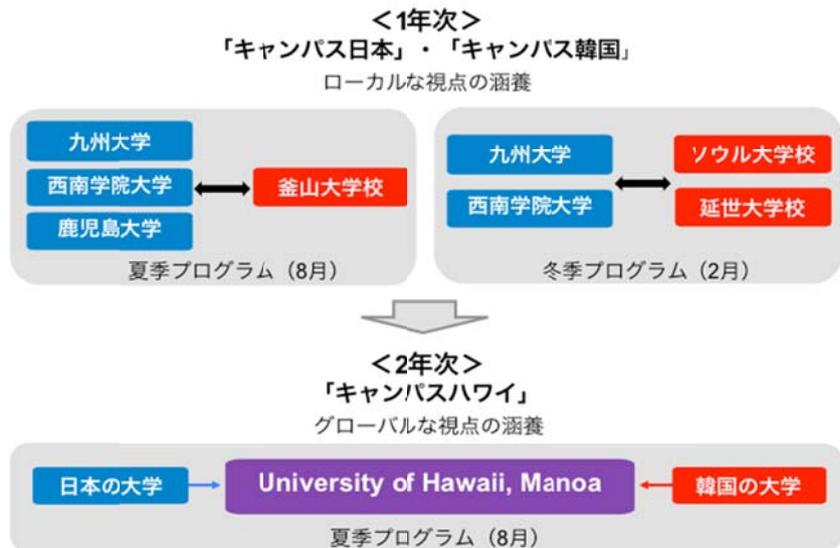


図2 アジア太平洋カレッジ

(1) プログラムの概要

① 事前学習

九州大学の学生には、前期総合科目である「韓国学への招待」、あるいは「韓国学との対話」の履修を義務づけている。同講義では、韓国への渡航前に韓国社会をはじめ、日韓関係及び朝鮮半島をめぐる国際関係について基礎的な知識を習得してもらう。教員による授業だけでなく、日韓を軸に活動している社会人を講師として招き、現場での体験をもとにした講演も行っている。また、選抜された学生を対象に英語と韓国語の少人数会話クラスも開講している。そして、担当教員の指導のもと、インターンシップで実施するプレゼンテーション準備を行う。後述するが、企業から事前に提示されたプレゼンテーションテーマを持って、5人の学生がグループになり、約2か月かけて調査・研究を進める(図3)。

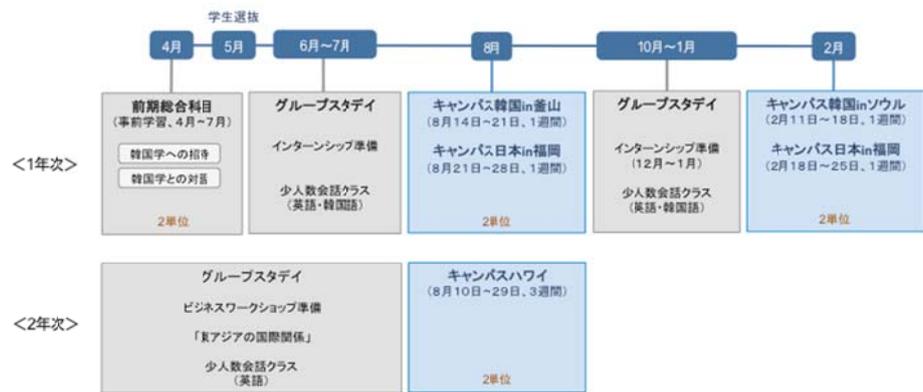


図3 年間スケジュール

② 「キャンパス韓国」・「キャンパス日本」

日韓の共通課題を取り上げる講義、学生主導で調査を行うフィールドワーク、最終プレゼンテーション及び企業インターンシップ、文化体験で構成されている。講義を含む全ての活動は基本的に英語で行われる。毎年夏季プログラムに日韓100名、冬季プログラムに日韓40名の学生が参加している。

- ・講義：日韓関係の過去と現状をはじめ、安全保障、経済開発、環境汚染、教育、自然災害など、日韓が抱えている共通課題にフォーカス。

- ・フィールドワーク：日本の学生5名、韓国の学生5名の混合グループを作り、キャンパス韓国 in ソウルでは、ソウル大学校と延世大学校の学生が、キャンパス韓国 in 釜山では釜山大学校の学生が主導して実施。キャンパス日本 in 福岡では、九州大学と西南学院大学の学生がリーダー役を務め、日韓関係や社会の変化が分かる場所を訪問・調査する。



グループディスカッション



フィールドワーク

- ・プレゼンテーション：キャンパス韓国の最終日にフィールドワークで調査した内容をもとに実施。プレゼン資料作成は、日韓混合グループ内のディスカッションをもとに共同作業。フィールドワーク中に気づいた点、日韓両社会の比較などを取り上げる。
- ・インターンシップ：福岡県に位置する企業で実施。企業から約2カ月前に課題をもらい、グループで取り組む。参加学生の関心分野や専攻にそって参加企業を選択するが、将来の就職を目的にするのではなく、社会問題に対する「問題解決力」を育てることに重点をおいている。プレゼン内容をもとに、CEO や社員と意見交換できることは、日韓双方の大学生たちにとって得がたい機会である。また、こうした地元企業による協力を得ることで、本プログラムは日韓両国の大学間交流に留まらず、地域をあげての人材育成プログラムに発展することができた。

企業	プレゼンテーション課題
福岡観光コンベンションビューロー	福岡と釜山の第3国(東南アジア、東アジア)、相手国首都などでの共同観光客誘致プロモーションの効果的な手法
九州電力株式会社	再生可能なエネルギーの普及拡大方案
七尾製菓株式会社	アジア各国への菓子の嗜好を踏まえた進出戦略
日本通運株式会社	グローバル物流を最適化するためのアイテム
NTT 西日本株式会社	ブロードバンド回線 (FTTH) を活用した新たな生活スタイル・行動スタイルの提案
住友商事九州株式会社	東アジアをつなぐ新しいビジネスプラン
株式会社やまやコミュニケーションズ	東アジアの食文化の特長を生かしたビジネス案
株式会社安川電機	10年後の社会情勢を踏まえて、10年後に向けた安川電機の新規事業を企画・提案する
株式会社ゼンリン	地図を活用したコトの提案



住友商事九州でのインターンシップ



日本通運でのインターンシップ

③「キャンパスハワイ」

グローバルアジェンダに対する協力の在り方を議論するアカデミックプレゼンテーションクラス、現地企業でのビジネスワークショップ、東アジアと米国の関係や移民の歴史に関する講義、フィールドトリップ、文化体験で構成されている。2015年度に日韓それぞれ10名ずつ、計20名が参加している。

- ・アカデミックプレゼンテーションクラス：安全保障、経済協力、社会・文化、教育、テクノロジーの5つのグループに分かれ、グローバルアジェンダの解決に向けた協力の在り方についてプレゼンする。3週間、英語文献でのリサーチをもとに、ディスカッションを重ね、アイデアを発展させる。



アカデミックプレゼンテーションクラス



フィールドトリップ

- ・講義：東アジアのリージョナリズムと米国、ハワイの社会・経済、移民社会の過去と現在を取り上げる。ハワイ大生も加わり、議論を通して理解を深める。
- ・フィールドトリップ：ハワイ大生とともに、パールハーバーやハワイ史跡、原住民村を訪問し、ボランティア活動にも参加。ハワイ福岡県人会との交流会を通して、移民社会の歴史やその実態に直接触れる。
- ・ビジネスワークショップ：日韓米3国の抱える共通テーマに対し、日韓の学生がそれぞれの国の

状況を取り上げ、プレゼンテーションを行う。そして、企業側からは学生の発表に対する講評とともに、米国の状況について説明してもらう。各国の状況と対応を比較しながら、類似性と相違点を見出していく。

Company	Presentation Theme
Honolulu Star Advertiser	Investigate newspapers' market situation in your country and propose the direction newspapers need to take for the future, and what they should do
Ohana Pacific Bank	Best Practices of Consumer Protection in Business
Hawaii Coffee Company	Investigate coffee's market situation of your country and propose a marketing strategy for Hawaii Coffee Company in your country
Roberts Hawaii	For Japanese students : Considering the weakening of the Yen to the USD over the past 3 years, what would you do to our existing business to continue the same guest counts? For Korean students : While the South Korean outbound travel market has been strong over the past few years they remain a small fraction of our guests. What would you do to our existing business to improve our guest counts from this market?



Ohana Pacific Bank でのビジネスワークショップ Honolulu Star Advertiser でのビジネスワークショップ

3. 参加学生の意識変化⁵

(1) 語学学習意欲の向上

図4は、1年次のキャンパス日本・キャンパス韓国に参加した日本人学生を対象に行なったアンケートの中で「参加して役に立ったと思うこと」に対する回答である。異文化理解とともに、語学学習への意欲向上や留学・海外志向の向上が多くを占めていることが分かる。記述式の回答では、韓国人学生との実力差を指摘する声が多かった。ここでいう実力とは、主に英語力やコミュニケーション力のことだが、その中でも特に英語力の高さにショックを受けたという回答が多かった。授業後

⁵ 九州大学アジア太平洋カレッジ（2014、2015）「カレッジ参加学生アンケート」。

に流暢な英語で質問し、英語でのディスカッションを主導する韓国人学生に対する高い評価が見受けられる。と同時に、英語の問題でうまく議論できなかったという悔しさや危機感を抱いた学生も少なくない。そして、その悔しさをバネに留学や語学勉強への意欲を表明している。韓国も日本も母国語が「英語」ではないからこそ英語力の差を感じる事ができたのである。これは欧米の学生との交流では得られない効果であろう。ここに、2人の日本人学生の感想を紹介しておきたい。

《学生①》

想像していたよりも韓国人の英語力が高く驚いた。フィールドワークのプレゼンテーションを考える際、私が自分の担当の台本を考えていた際にも韓国人に何度か英文の指摘を受け、それが非常に悔しかった。同世代なのにこんなにも英語力の差が大きいかと思うと自分が情けなくなった。この一件は、私の今後の学習意欲に火をつけてくれた。

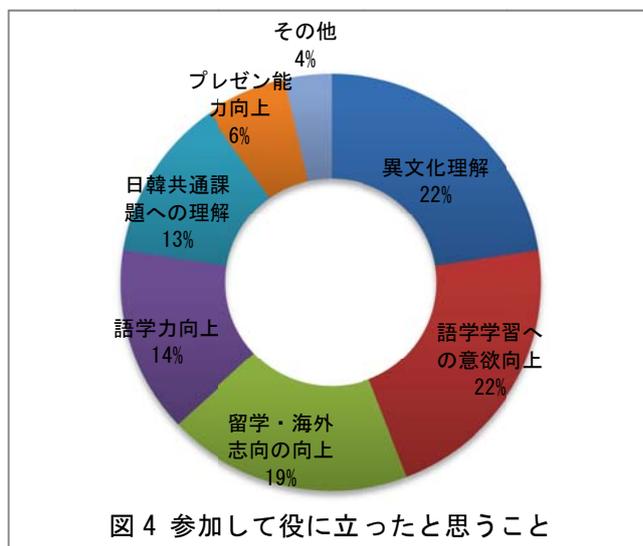
《学生②》

自分も努力次第でグローバルな局面で活躍できる人材になれるかもしれないという自信を与えてくれた。と同時に、語学力、知識、海外経験等で自分はこのままでは世界に太刀打ちできないという危機感も感じた。その強い危機感があったからこそ、自分をさらに高めるべく努力を重ねることができた。そして今は将来海外で働きたいと考えている。このプログラムが私を変えてくれたと思う。

(2) 学び方の再考

現地に出向いて直接体験したことが、日頃の学びに対する姿勢にも影響を及ぼしていることが分かった。プログラムに対する満足度においては、キャンパス韓国・キャンパス日本とも、フィールドワークに対する満足度が高かった。テーマを持って調査を行うだけでなく、相手国の学生が普段の生活の中で訪れるところに連れて行ってもらったことで、同世代の目線から紹介される相手国の魅力を体験できた。自由に計画を立て、時間拘束もなく納得の行くまで見学できたことに満足している、という感想が多く見受けられる。

移動中には、普段疑問に思っていたことを話し合い、互いに理解を深める機会になったという声が多かった。グループによっては、受験や大学生活の話をはじめ、日韓間の懸案事項である歴史認識問題や慰安婦問題、領土問題など、マスコミを通して接してきた相手国の情報と、実際のそれぞれの社会で生活している人々の考えとの間にどのようなギャップがあり、なぜそのようなギャップが生じる



のか、などを真剣に考えたようである。ある時には、互いの考えが鮮明に異なることを再確認する機会になり、またある時には、これまでの認識が単なる誤解に過ぎず、偏見によって正しい理解が出来ていなかったことに気づく場面となった。

キャンパス日本に限って見てみると、インターンシップに対する満足度が最も高かった。約2カ月という長い準備期間を経て、その成果を企業の人前でプレゼンテーションし、社員からコメントをもらうことで、深い達成感と自信、また問題解決への新たな観点も得られたからであろう。不足しているところを発見し、それをどのように補っていけば良いのか、ヒントを得ることができたという感想が多く見られる。参加学生が、講義や企業訪問のような受け身のプログラムよりも、現場での体験をもとに視野を広げられるフィールドワークとインターンシップにより興味を示し、積極的に参加していたことが分かる。講義の時間にも学生が互いにもっと意見交換できるように、担当教員は話題を提供するだけにとどめてほしい、という要望さえあった。そこには、ディスカッションを通じて積極的に学ぼうとする学生の姿勢が見て取れる。

さらに、「目先の情報からのみ判断するのではなく、自分の目で見て判断することを怠らない学びにしていきたい」、「もっと現地に行って直接体験しながら、その場でしか学べないことを吸収していきたい」という感想が多く見受けられた。これらの感想は、学生自らが、日頃の学び方を見直すきっかけになったことを示しており、そこからは、受け身ではなく、自ら体験し考えていくことの重要性に目覚めたのだと言えよう。

《学生③》

最も勉強になったのはグループワークである。韓国人学生と日本人学生の混合グループで調査を行い、自分たちが学んだことのプレゼンを作るというものである。現地で直接見て判断することの重要性がわかった。英語、韓国語、日本語を使いながら話し合い、ひとつのものを協力して作るものがとてもむずかしいと感じた一方で、とても充実感を感じた。

《学生④》

韓国に訪れるまで、韓国人にはニュースで目にする反日デモをするまではなくとも反日的な感情を持った人が多いのではないかと思っていた。しかし、実際に足を運ぶとそれは少数意見に過ぎないのだということが見えてきた。もっと海外に行ってみて、直接体験しながら、その場でしか学べないことを学んでいきたい。

(3) 相手国に対する見方の変化

参加学生の感想から浮かび上がってきたことは、相手国に対するただの印象論が、具体的なストーリーを持った認識論へと変化したことである。実際に現地を訪れ、同世代の学生と接しながら、「友達」となり、その友たちを通じて相手国を「眺める」ようになった。自国の習慣や考え方を相対化し、柔

軟な態度で相手を受け入れるようになったという感想もよく見受けられる。

日本人学生の中には、渡航前に参加を躊躇する者もいた。日頃のマスコミ報道から「反日の国」韓国という印象が強かったからである。しかし、韓国社会における日本の存在の大きさに気づくとともに、双方には違いよりも共通点が多く、親しみを感じたという答えさえある。嫌韓ムードが強まっている日本社会への警戒感を表した回答もあり、これからの日韓関係を切り開いていくのは次世代の自分たちであるという認識もにじみ出ている。

《学生⑤》

メディアの情報を批判的に捉え、反日・嫌韓の構造について何が本当に正しいのかを考えていくことが大事である。実際に日本と韓国の学生が交流していくことが必要だと思う。将来、次世代を担っていく中で、どういう職業・立場についたとしても、その考え方の根本に日本と韓国は友人になれる国同士なのだという認識があれば、世代を重ねる中で日韓関係は徐々に改善していくと思う。

《学生⑥》

ネット上はもちろん、書籍でも嫌韓感情をあおるような媒体が日本国内では溢れており、こうした偏った情報を鵜呑みにしないよう心掛ける必要があると思う。

韓国人学生からは、日本に対する見方の変化が見受けられる。「それまでの日本と日本人に対する認識において偏見が多かったのではないか」、「日本の素顔に接近しようとする努力を怠っていたのではないか」という気づきの言葉が多かった。また、日韓の経済連携などに触れ、両国関係の重要性について改めて気づいたという感想も多かった。

《学生⑦》

日韓政治摩擦の原因になっている慰安婦問題や歴史認識問題に対する日本人の見方を知ることができた。両国間の摩擦は、問題を解決しようとする意思と意思疎通の不足だと感じた。今回プログラムに参加して日本人学生と、敏感な問題について多く話しあいながら、互いの立場を知るようになった。また、両国がこれらの問題について間違った対応をしていることに気づいた。第三者の立場にあるアメリカ人講師の講義を聞き、アメリカ領事の話聞いたことは非常に大きな意味がある。

《学生⑧》

私は日本と日本人に対してネガティブな印象を持っていた。マスコミと歴史授業の影響を受けていた。しかし、プログラム参加後、私がそのような偏見を持っていたことがいかに愚かなことであったのかが分かったと同時に、日本人と韓国人がどれほど親密になれるのかに気づいた。グローバルマインドを育てることを妨げるこのような偏見を克服できたことが私にとっては重要なものである。またこのプログラムは日韓がどれだけ重要な協力パートナーであるかを教えてくれた。

(4) グローバルな視点の涵養

2015年にスタートした「キャンパスハワイ」に対しては、日本でも韓国でもない、ハワイという第三の場所で日韓学生が協学する意義を見出した感想が多く見られた。グローバル社会における日韓両国の立ち位置を考えるきっかけになり、国境をまたがる課題にどのように対応していくべきかについて理解を深めることが出来た。また、ネイティブハワイアンや現地の移民コミュニティと接する機会を持ったことで、ハワイと米国本土の関係、及び移民社会の新たな傾向について初めて知ることが出来た。東アジア社会が抱えている課題をどのように捉えるか、非常にインスピレーションを得ることが出来た。

学生が一番力を入れて取組んだ事は、アカデミックプレゼンテーションである。プレゼンテーションテーマを絞り、英語文献でのリサーチをもとにディスカッションを重ね、アイデアを発展させていくことは決してやさしいことではなかった。しかし、これらの過程を通して、英語によるコミュニケーション能力を高めただけでなく、受け身の授業では決して得ることができないアクティブな学びを経験出来た。経済をテーマにしたグループは、アジア地域の貧困問題に目を付け、日韓がそれぞれの強みである医療やIT分野を通じて発展途上国ミャンマーを支援し、先進国と発展途上国の格差を埋めることについてプレゼンした。日韓経済協力の舞台を東南アジアの第三国へ広げ、グローバルアジェンダに挑戦するための基盤として両国関係を捉える好発表であった。その他の4つのグループも、一国の対応では解決できない課題にどう向き合うべきかについて、グローバル社会を視野にいれながら真剣に議論した結果をプレゼンした。ハワイという第三の場所で多様な見方に触れることができたからこそ、日韓関係に閉じてしまうのではなく、視野を広く持った学びができたと確信している。

《学生⑨》

アカデミックプレゼンテーションを通して、プログラムが始まってから日韓の学生がより多くの時間を議論に割くことができたという点で1年次のプログラムとは大きな違いがあった。各講義で段階が踏まれていったので、発表間近に議論が足りない中でプレゼンを完成させるという事にもならず済んだ。そのことで英語を使う機会も増え、プレゼンテーション能力を伸ばすことができた。共通課題について第三者の立場から考えることができ、これまでにない視点を手にできたと思っている。

《学生⑩》

最終プレゼンテーションに向けた調査や討論をじっくりできた。昨年もプレゼンはあったが、各グループで深くまで討論しあう時間が限られていた。一方、今回は3週間という時間を十分に活用しながら、深くまで討論しあうことができた。韓国人2人と日本人2人の4人での文献探しや意思疎通がすべて英語である点、経済という難しいテーマでプレゼンの概要を一からつくらなければならない点など、困難を強いられる場面は多々あった。なかなか目的の文献を見つけられず、2週目に入ってプレゼンの概要を大幅に作り直すことになり、焦りや不安に駆られる毎日だった。しかし、図書館や学校

の教室、部屋に集まり、討論を重ねた結果、最終発表では、その成果を十二分に発揮できたため非常に良かった。少人数であったことにより、一人ひとりが日韓米関係について深く考えることができたように思う。

結びに代えて：1、2年生向けプログラムの重要性

本プログラムは、前身である「日韓海峡圏カレッジ」を含めれば、5年間の蓄積を有している。これまで520名を超える日韓の学生が韓国と日本、米国のハワイでキャンパスを共有して学び合った。長期留学や学び方への再考を促してきた本プログラムの効果を考えれば、参加条件を1年生と2年生に限定し、目的ある学習への意欲を引き起こした意義は大きい。

5年前に本プログラムがスタートした時とは異なり、現在は学内外で多くの短期プログラムが企画・運営されている。しかし、その多くは特定の学部が運営主体となり、専門に特化されているものである。専門課程に入る前に学び方への再考を促し、長期留学への動機づけを与えるプログラムは見当たらない。1、2年生での体験がその後の大学生活や長期留学への関心を左右する影響の強さを鑑み、今後は1、2年生向けプログラムの開発・実施に最も力を入れるべきではないかと思われる。

2年を1クールとする本プログラムは、2015年度で1クールを終えたばかりである。1年次の日韓交流を通して互いの違いを受入れる柔軟さを養い、2年次にハワイ大学に集まり、グローバルな視点を養う深化学習を行なったことで、好スタートを切れたと確信している。今後、2018年まで4クールを実施する予定である。韓国のソウルと釜山、日本の福岡、米国のハワイというそれぞれの場所が持つ特徴を活かし、キャンパス共有を通じて外国の学生と協学することに引き続き重点をおきながら、更なるプログラムの充実化を図っていきたい。

《出版物の紹介》

松原孝俊・崔慶原編『日韓が共有する近未来へ』本の泉社、2015年。

2011年度から14年までのプログラムの成果を「学生交流」と「グローバル人材育成」というキーワードでまとめた。海峡を挟む日韓両国を軸にした国際共同教育が持つ意義とその可能性を社会へ発信し、広く共有するためである。両国の学生が交流を通じて、分かり合い、互いの良いところを学び合う姿が描かれている。

プログラムの企画と運用にかかわった日韓両国の教員と企業インターンシップの受け入れ担当者、文部科学省の関係者の論考、そして参加した日韓の学生14名の報告で構成されている。

